

宮本常一写真から上島町の現在、未来を考える

かみじま町空き家よくし隊 平田浩司

団体名 特定非営利活動法人かみじま町空き家よくし隊

事業名 宮本常一撮影の写真資料に探る「上島町における昭和の暮らし」の調査・展示事業

空き家改修による移住促進

愛媛県上島町は、同今治市と広島県尾道市を結ぶ西瀬戸自動車道（愛称「しまなみ海道」）に寄り添うように位置する、全域が離島で構成された自治体です。町内四つの島を橋でつなぐ県道には「ゆめしま海道」の愛称が付けられ、最近では、しまなみ海道を訪れるサイクリストにも知られるようになってきました。

上島町を訪れる旅行者のなかには、島の穏やかな雰囲気惹かれ、移住を

考える方もいます。そんな方にとって、隘路となるのが「住居が見つからない」という問題です。町内に多く存在する空き家を、移住希望者のための住居に充てられれば良いのですが、空き家として放置されている物件の多くは、容易に解決できない問題を抱えています。例えば、何代も前から相続登記がなされていない、権利関係が複雑で係争中である、雨漏りや白蟻の被害があり改修に莫大な費用がかかるなどです。

そこで、令和3年度に空き家の活用を目的とする「特定非営利活動法人

かみじま町空き家よくし隊」を創設し、およそ一～二年に一軒のペースで町内の空き家を整備してきました。①登記の問題をクリアでき、②助成金（補助金）とDIYの範囲で改修が可能、という比較的条件に恵まれた空き家に限られますが、これまでに三軒ほどの整備実績があります。現在は、二軒を移住希望者向けの賃貸物件として運用、残る一軒を地域振興活動のために活用し、四軒目の空き家を改修中です。

宮本常一写真の調査と 町内での写真展

上島町への移住促進を進める上で、住居以外にもう一つ大きな課題が存在します。それは、日本中の過疎地域で直面している働き手世代・子育て世代の「仕事が無い」という現実です。本町においても、住居を用意すると同時に仕事の問題にも取り組んでいく必要があります。

上島町における「仕事」の問題を考えるにあたり、まず私たちが思い出したのは、民俗学者の宮本常一が本町の島々を訪れて写真を撮っていたことでした。宮本の著作からは、彼が漁業や建築をはじめその土地の生業に強い関心を抱いていたことを読み取ることができます。

宮本は昭和三二年八月に弓削島と岩城島を、五二年五月に魚島を訪れています。氏が見聞きした当時の生業が、こ

の地域の「仕事」を再創造していく上でヒントを与えてくれるのではないかと考えました。そこで私たちは、宮本が残した写真資料を調査・把握し、何枚かを抽出してストーリー

を組み立てて写真展を開催することで、この地域の暮らしと生業を再発見する機会を用意しようと「離島人材育成基金助成事業」を活用し、「宮本常一撮影の写真資料に探る『上島町における昭和の暮らし』の調査・展示事業」に取り組みしました。

本事業では、まず宮本常一の写真資料を保管する山口県の周防大島文化交流センター（宮本常一記念館）を訪れ、同センター学芸員の徳毛敦洋さんにご案内いただきながら、上島町の島々

で撮影したと思われる写真のネガデータを確認させていただきました。点数は三五九点にのぼり、このうち三〇点を写真展に用いました。



周防大島文化交流センターにて。徳毛敦洋学芸員による解説風景。

事業の実施にあたっては、愛媛大学社会共創学部の新渡辺敬逸^{ひろまさ}准教授にもご参画いただきました。学生と一緒に周防大島文化交流センターに調査へ行っていたいたほか、写真（展）の解説パネル、会場で配布するパンフレットのテキスト作成、写真展の会場設営などを手伝っていただきました。

写真展のタイトルは「民俗学者宮本常一が歩いた上島町」としました。比較的多くの写真が見つかった「弓削島」と「魚島」を中心に、「岩城島、因島^{いんしま}」を加えた全三パート構成です。因島は上島町外の島ですが、宮本の訪問当時、造船業で非常に栄えており、弓削島や生名島から多くの住民が因島へ通勤するなど、町内の島々の住民生活に深い影響を残したことが写真から伝わると判断し、構成に加えました。

写真展は、上島町の協力のもと、町が管理する生名島の「立石港務所」において令和六年一月七日から一二日

間の日程で開催しました。尾道市因島の土生^{はぶ}港長崎橋と立石港を往復する生名フェリーは、町内を発着する定期船の中でも利用者が多い航路です。実質的に町の「玄関口」となっている立石港の待合室の一階ロビーで、写真展を開催できたことは大きな収穫です。

その後、魚島の「魚島地域交流施設・地域交流ホール」において同月二日から五日間の日程で巡回展を開催しました。町を構成する地区で唯一、他の島と橋でつながっていない魚島地区でも写真展を実現でき、とても嬉しく思っています。

島が生業創造に向けて

上述の通り、町内二会場において、計一七日間に渡り開催した写真展では、



魚島会場で展示写真に見入る来場者の皆さん。

宮本常一や彼の写真資料の存在を知らなかったという来場者がいた一方で、写真の人物や場所、建物についての具体的な情報を提供してくれた方や、現

離島人材育成基金助成事業 事務局より

地域の持続可能性を考えるにあたり、歴史資料の活用は欠くことのできない視点であり、過去の助成事業でも同様の事例が散見されます。

本件は、定住に不可欠な「仕事」の課題について考察していくにあたり、島の生業を捉えた宮本常一の写真資料の活用に着眼した点がユニークです。

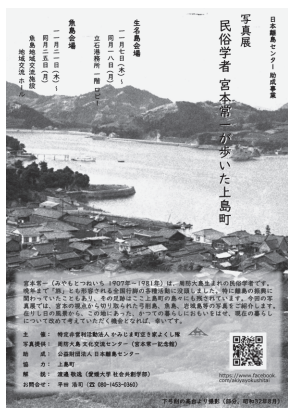
事業報告書には、上島町が抱える産業・雇用に関する課題解決に向けた展望が多く記されていました。宮本写真から、撮影当時の町内（おもに弓削島、魚島）が平地から山頂付近まで広く農地として利用されていたことを読み取り、現在の休耕地や耕作放棄地の利活用の検討に活用しています。観光振興の一環としてポタリング（目的地を定めない軽いサイクリング）のマップ制作に民俗学的記録を取り入れるなど、事業で得た知見を横展開する計画もあるようです。

今回実施した調査や写真展の成果を一過性のものにしないため、情報として整理・蓄積し、今後の活動に活かそうとする、かみじま町空き家よくし隊のこれからの島づくりに注目していきます。

在の国立弓削商船高等専門学校や日立造船が過去に発行し卒業生や従業員らに配布した印刷物、個人撮影の古い写真が家に残っていることを教えてくれた方もいました。写真展を通して、宮本が撮影した当時の暮らしを知る・振り返る機会を皆さんに提供することができたと感じています。

じつは、空き家を整理していると、そのまま残されている大量のアルバム（写真類）を発見することがあります。宮本写真はもちろん、当然ながらそれらの写真も地域の過去を知る貴重な資料です。将来的には、空き家整備などを通じて見つけた資料についてもデータ化を進め、アーカイブとして利活用可

能な状態とし、地域の皆様と共有することを目指しています。「当時の生業の記録を、今後の生業（再）創造におけるヒントとする」という目標を達成するため、今後も活動を続けていきます。



写真展のチラシ。町の広報誌と併せて配布するなど、写真展開催の周知を図った。

平田 浩司 ひらた こうじ

特定非営利活動法人かみじま町空き家よくし隊事務局。昭和四十七年生まれ、大阪市出身。令和二年より三年間、上島町役場で「島おこし協力隊」として勤務。任期終了後に弓削島で「ゲストハウスみちしお」を開業。マンガの島として知られる高井神島の振興にも携わっている。